

# 東北海域の漁業資源の現状

北川大二（東北水研八戸支所）

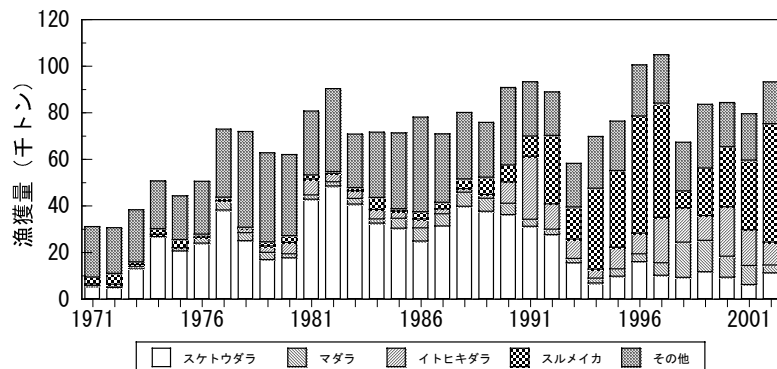
キーワード：漁獲量・底魚類・沖合底びき網漁業

我が国の漁業生産量（漁獲量）は1984年（昭和59年）に1280万トンのピークに達した後に減少を続け、2002年（平成14年）には600万トンを超えて、ピーク時の半分以下になってしまった。この大幅な減少は主に遠洋漁業と沖合漁業における漁獲量が減少したことによるもので、特に沖合漁業ではマイワシやマサバの減少が非常に大きい。また、それ以外の沿岸や沖合に分布する水産資源でも減少しているものが非常に多いのは事実である。しかしながら、東北海域で漁獲されている漁業資源には、サンマにみられるように比較的安定しているものや、近年顕著に増加しているものも多くある。ここでは全体として資源状態が良好ともいえる東北太平洋海域の底魚資源の動向について、沖合底びき網漁業による漁獲量の変化を中心に紹介する。

東北地方の太平洋側は統計上は太平洋北区と呼ばれ、底魚類では千葉県から青森県までがその範囲になっている。沖合底びき網漁業による近年の総漁獲量は7～10万トンの範囲で増減しているが、変動幅は比較的小さく全体としては安定しているといえる。しかし、漁獲物の組成は年代により変化し、1990年代前半まではスケトウダラが全体の半分近くを占めていたが、最近ではスケトウダラは減少し、スルメイカ、イトヒキダラ、マダラなどの漁獲量が増加している。東北海域の底魚類の漁獲動向を魚種ごとにみると、次の3つのタイプに分けることができる。

- ①長期的に漁獲量が減少し、資源が低水準にあるもの。  
メヌケ類、キチジ、サメガレイ、アブラツノザメなど
- ②数年から10年程度の周期で漁獲量が増減しているもの。  
マダラ、スケトウダラなど
- ③近年、漁獲量が増加し、資源が高水準にあるもの。  
ババガレイ、キアンコウ、ヤナギムシガレイ、アカガレイ、スルメイカ、ムシガレイ、ヒレグロなど

ババガレイ、アカガレイ、キアンコウ、ヤナギムシガレイなどはいずれも1980年代から1990年代前半にかけて漁獲量が極端に少なくなり、資源の回復は困難と考えられたが、1990年代後半になってから漁獲量が急激に増加した。このような漁獲量の増加は暖水性魚類（キアンコウ、ヤナギムシガレイ）だけでなく、冷水性魚類（ババガレイやアカガレイ）でもみられており、その増加原因は明確ではない。しかし、少なくとも他の海域から大量に来遊してきたために漁獲量が増加したのではなく、環境の変化により東北海域に分布する資源そのものが増加したと考えられる。このように資源が回復した魚種について、今後は適切な資源管理を行って、水産資源を持続的に漁獲・利用していくことが重要である。



東北太平洋海域における沖合底びき網漁船による主な底魚類の漁獲量